

中間評価論文要旨

オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の形成

—“Foxfire” 誌の分析を通して—

藤 井 大 亮^{*}

1. 問題の所在及び研究の目的と方法

日本の歴史教育が「暗記科目」化しているという現実がある。この点について、日本の歴史教育の特質を「the history」（「定番の絶対的な歴史」）と「a history」（「一つの解釈としての歴史」）という観点から論じた今野日出晴（2005）は、日本の「歴史教育では、歴史教科書の叙述が『the history』のように意識され、それを受けて、教師の『語り』があたかも『御宣託』のように、『絶対的な語り』として教室を支配してきた」（p.6）と述べている。そうした歴史教育の在り方が問題なのは、その結果として形成される生徒の歴史認識の画一化を招くからである。

この問題に対して、筆者は、オーラル・ヒストリー、すなわち、ある個人に記憶を口述してもらい、これを記録・分析する一連の作業、およびその成果としてのヒストリオグラフィー（口述史、口承史）を導入することが、学校歴史教育において、「the history」化した歴史認識を変革する契機となりうると考える。とはいえ、このことを裏づけるにはオーラル・ヒストリーを通して生徒は如何なる歴史認識を形成しうるかが、まずは解明されなければならない。それは、生徒が実践したオーラル・ヒストリーの成果を分析することで、可能になると考える。そこで、本研究では、オーラル・ヒストリーによって形成された歴史認識が如何なるものであるかを明らかにすることを目的とする。この目的のために、“Foxfire”誌には生徒の歴史認識が表象されているものとみて、これを分析する方法をとる。“Foxfire”誌とは、数あるオーラル・ヒストリー・プロジェクトのなかで、知名度、成果、影響力といった点で他を圧する、米国ジョージア州における“Foxfire”プロジェクトの成果として、生徒が制作した雑誌である。“Foxfire”誌の内容を扱った先行研究としては、これを地域学習という観点から研究した小川浩之（1991）が挙げられるが、そこでは、考察の対象とした資料が“Foxfire”誌の選

※社会科教育学

集の一部であり、“Foxfire”誌そのものではないという資料的な限界もあり、“Foxfire”誌におけるオーラル・ヒストリーの全貌を捉えるには至っていない。これに対して、本研究では、“Foxfire”誌を創刊号から悉皆調査することで、オーラル・ヒストリーを通して形成された生徒の歴史認識について、その実相を見出すことを意図している。分析の対象としたのは、1967年の創刊号から2006年のVol. 40 No. 3 & 4まで、40年間に発行された“Foxfire”誌122冊に掲載されている1004本の記事である。

2. 論文の構成

序 章 問題の所在及び研究の目的と方法

第1節 問題の所在及び研究の目的と方法

第2節 本論文の構成

第3節 主要用語の定義

第1章 オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の意義

第1節 オーラル・ヒストリー研究の歴史と領域

第2節 オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の意義

第2章 米国初等中等教育のオーラル・ヒストリー実践における“Foxfire”プロジェクトの位置

第1節 米国初等中等教育におけるオーラル・ヒストリーの実践史

第2節 米国初等中等教育におけるオーラル・ヒストリー実践の整理

第3節 米国初等中等教育のオーラル・ヒストリー実践における“Foxfire”プロジェクトの位置

第3章 “Foxfire”誌におけるオーラル・ヒストリーの内容とその変遷

第1節 “Foxfire”誌を分析する視点と方法

第2節 “Foxfire”にみる生徒およびインタビューイの属性と“Foxfire”プロジェクトの活動

第3節 “Foxfire”誌におけるオーラル・ヒストリーの内容とその変遷

第4章 “Foxfire”誌にみるオーラル・ヒストリーにおける歴史認識の形成

第1節 “Foxfire”誌にみるオーラル・ヒストリーにおける歴史認識の射程

第2節 “Foxfire”誌にみるオーラル・ヒストリーにおける歴史認識の形成

終 章 本論文の成果と今後の課題

3. 論文の概要

第1章では、オーラル・ヒストリーにおける歴史認識を、実証主義的な文献史料解釈にもとづく歴史認識との対比において考察し、また、オーラル・ヒストリーを歴史学の発展過程に位置づけることで、オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の意義や課題を明らかにした。オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の意義は、①能動的・主体的な歴史認識を可能にすること、②複眼的な歴史認識を可能にすること、③文献史料からは見えてこない民衆の生き様や日常を認識することができることにある。一方、オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の限界については、①捉えられる歴史的時間の範囲が短いとの指摘と、②口述史料の信憑性もふくめて、オーラル・ヒストリーにおける歴史認識の主観性についての指摘がある。また、第1章では、学問研究の次元でのオーラル・ヒストリーの成果について言及した先行研究を整理し、オーラル・ヒストリーの成果を分類する枠組みとして、①政治史、②経済史、③文化史、④社会史（家族史）、⑤社会史（黒人史・民族史・移民史）、⑥社会史（女性史）、⑦社会史（労働史）、⑧社会史（その他）、⑨地方史・コミュニティ史、⑩個人史、⑪その他からなる「オーラル・ヒストリーの領域」を設定した。

第2章では、米国初等中等教育におけるオーラル・ヒストリー実践について、その成果に着目して整理し、“Foxfire”プロジェクトの位置を明らかにした。まず、第1章で構成した「オーラル・ヒストリーの領域」が、米国初等中等教育におけるオーラル・ヒストリーの成果を捉える枠組みとして機能するかを検証した。先行研究で特定されたオーラル・ヒストリーのテーマは、本研究における「オーラル・ヒストリーの領域」のなかのいずれかの項目に位置づけることができた。この結果から、「オーラル・ヒストリーの領域」が初等中等教育におけるオーラル・ヒストリーの成果を分類する上で有効であると判断し、これを用いて、“Foxfire”プロジェクトの成果について言及している先行研究を分析し、整理した。その結果、“Foxfire”プロジェクトの成果は、「オーラル・ヒストリーの領域」のなかの、③、⑦、⑨、⑩の項目に該当することが明らかになった。さらに本研究では、実際に“Foxfire”プロジェクトの成果としての“Foxfire”誌を分析し、①0.1%、②0.1%、③25.7%、④5.3%、⑤1.3%、⑥0%、⑦21.4%、⑧0.4%、⑨24.4%、⑩8.8%、⑪12.5%であることを見出した。これにより“Foxfire”プロジェクトの位置は明らかになったものの、⑪「その他」カテゴリ

ーの割合が比較的高いこと、①や②のようにほとんど無に等しいカテゴリーが存在することなどの理由から、“Foxfire”誌の内容的特徴を明らかにするには、カテゴリーを再構成することが課題となった。

第3章では、第2章の課題をうけて、“Foxfire”誌を分析し、そこにみられる（ヒストリオグラフィーとしての）オーラル・ヒストリーの内容を明らかにした。“Foxfire”誌を分析するにあたり、本章では、予め分析の枠組みを設定せず、記事の共通点を探り、帰納的にカテゴリーを構成するアプローチを採った。その結果、次の9つのカテゴリーが構成された。①伝統的慣習・俗信11.0%、②生活技術15.4%、③職業・仕事21.1%、④個人史24.5%、⑤家族史5.1%、⑥建物・場所の歴史9.0%、⑦自然・環境1.9%、⑧フィクション5.5%、⑨その他6.6%である。次に、1967年から2006年までの40年間で10年単位で時期区分し、各カテゴリーの割合が、どのように変動してきたかを分析した。その結果、次の傾向が見てとれた。すなわち、時代が下るにつれ、①と②は通減し、逆に④と⑤は漸増傾向にあり、③と⑥も、全体としてはやや増加傾向にあること。⑧はごく初期の頃に見られたが、その後は姿を消すことである。ここから、“Foxfire”誌に見られるオーラル・ヒストリーは、時代が下るとともに、相対的に民間伝承の割合が減じ、口述史の割合が増していることが見出された。つまり、“Foxfire”誌におけるオーラル・ヒストリーの内容が、時代とともに変化しているということである。これは、先行研究では指摘されていない、“Foxfire”誌それ自体がもつ歴史性である。この他には、例えば、生徒が、以前に書かれた記事を先行研究として、調査を行っているということ、前の生徒が完成できなかった記事を引き継いで書かれた記事があるということ、コミュニティのなかで、“Foxfire”の活動が、親から子へ、おじ・おばから甥・姪へ、先輩から後輩へと継承されていっているということなどが挙げられる。こうした歴史性に加え、筆者は、“Foxfire”誌の社会的機能を見出した。すなわち、“Foxfire”誌は、オーラル・ヒストリーをプールするアーカイヴスとしてだけでなく、それを普及するメディアとして機能し、オーラル・ヒストリーを人々に共有させることで、南部アパラチア地域の「our history」の創造（歴史認識の共有）を促しているということである。

第4章では、“Foxfire”誌の言説を引用しながら、オーラル・ヒストリーを通して形成された歴史認識の特質について、歴史認識の射程に着目して考察した。“Foxfire”誌を分析した結果、口述史（語ってもらった歴史）における歴史的時

間の範囲は100年に満たないが、口承史（語り継がれた歴史）の場合は150～200年間の歴史的時間を捉えていることを明らかにした。また、歴史的空間については、インタビュー一次第では、オーラル・ヒストリーによって、世界の地理を捉えることができることを明らかにした。そのうえで、オーラル・ヒストリーにおける歴史認識について、「大きな歴史」と「小さな歴史」という観点から考察した。“Foxfire”誌に見られるオーラル・ヒストリーにおける歴史認識は、「小さな歴史」の範囲を中心とするものの、必ずしもそれに留まるものではなく、個人史などの「小さな歴史」の学習を通して、合衆国史や世界史といった「大きな歴史」の一端を深く学んだ生徒がいたことを見出した。さらに、“Foxfire”誌においては、はじめから「大きな歴史」の新たな一面を掘り起こすことを意図した試みが見られたことを実証した。“Foxfire”誌に見られるオーラル・ヒストリーにおける歴史認識には、(i) 先ずインタビューしたい人物がおり、その人に語ってもらった話が、生徒にとっての認識内容となったもの（カテゴリー④、⑤、②および③の一部）と、(ii) 先ず調べたいテーマがあり、そのテーマに関して、文字史料からは分からない歴史の具体的諸相を認識したもの（カテゴリー①、⑥、②および③の一部）がある。また、オーラル・ヒストリーは、語り手と聞き手双方の存在を前提とし、両者の相互作用の中で生起する営みである。そのことが、「小さな歴史」の認識、「小さな歴史」を通じた「大きな歴史」の認識、そして「大きな歴史」の（再）認識というバリエーションを生みだし、ひとつの歴史のストーリーを生徒に与える歴史教育では為しえない、多様な歴史認識の形成を促していると考えられるのである。

4. 今後の課題

本論文では、“Foxfire”誌の記事を定量的に分析することを中心としたが、今後は、個々の記事を丁寧に解釈し、分析を精緻化していくことを課題とする。もうひとつは、オーラル・ヒストリーの成果としての“Foxfire”誌に焦点をあてたため、オーラル・ヒストリーにおける歴史認識形成の過程について、十分に論じられなかったことである。この点を突き詰めることも今後の課題とする。

5. 主要参考文献、資料

小川浩之（1991）「アメリカの地域学習におけるオーラル・ヒストリーの研究— Georgia 州

Rabun County における “Foxfire” magazine を事例として― 筑波大学教育研究科修士論文

今野日出晴 (2005) 「歴史叙述としての教科書」『社会科教育研究』No. 96, pp. 1-12.

Lanman, Barry A. and Laura M. Wendling. (2006) *Preparing the Next Generation of Oral Historians: An Anthology of Oral History Education*. Altamira Press.

Neuenschwander, John A. (1976) *Oral History as a Teaching Approach*. National Education Association Publications.

Sitton, Thad, George L. Mehaffy, O. L. Davis, Jr. (1983) *Oral History: A Guide for Teachers (and Others)*. University of Texas Press

Wigginton, Eliot.(1975) *Moments: The Foxfire Experience*. Star Press Inc.

Wigginton, Eliot and his students.(1972) *The Foxfire Book*. Anchor Books.

The Foxfire Magazine (1967-2006) Vol. 1 No. 1 ~ Vol. 40 No. 3 & 4, The Foxfire Fund, Inc.